

放牧養豚の試み

内村利美
(農学部附属農場)

目的

安価の単味飼料（圧片大麦、圧片トウモロコシ）と焼酎粕を給与し、荒廃地（特に放牧牛が採食しない雑草がはびこる）において豚を放牧し、発育調査、食味調査および放牧地の跡地の利用について検討した。

また、年間を通して焼酎粕をどの程度まで給与できるかについても調査を行い、今後の経営に役立てる基礎資料を得ることとした。

材料および方法

面積約 2 ha の荒廃草地に白豚（L×W×D）100頭を平成13年 6月21日と平成13年 7月13日に50頭ずつ放牧を開始した。放牧開始時の豚の平均体重は、約40kgであった。放牧地の外周は電気牧柵を設置し、脱柵を防止した。

放牧場内には給餌施投（5トンタンク 2基）を設置し、タンク内からの流下式により単味飼料を給与した。焼酎粕についても 5 トンタンク 1 基を設置し、単味飼料の上から流し込み、いわゆるドブ飼い状態で給与した（写真 1）。給水については豚用の給水機を設置し、自由飲水とした。その他に避難場所として長さ15m、幅 5 m の輸送用コンテナを設置し、内部にはシラスと土着菌で発酵させたノコクズを敷いた。放牧地内には山林を含め、庇陰林とした（写真 2）。

食味調査については。放牧豚と入来牧場の慣行の方法で飼養された豚の肩肉を用い、学生38名をパネラーとして行った。調理方法は焼き肉とし、肉の色、脂肪の色、香り、味の 4 項目についてアンケートした（図 1）。

結果及び考察

地域の有機物資源と低価格の飼料を給与し、豚を放牧することによって、飼養期間中事故死する豚は全くなく出荷まで飼育することが出来た。チカラシバが優先していた荒廃草地の雑草が完全に除去され。その後牧草を播種する段階までの草地更新作業が行えた（写真 3 および 4）。

食味調査した結果では。肉の色および脂肪の色については対照区より劣ったが。香りおよび味については放牧豚の方が優れているという評価を得た。

今後の検討課題として放牧養豚による草地更新方法の評価や更新した草地の利用方法に関する事や豚の肥育期間の短縮等について検討していきたい。

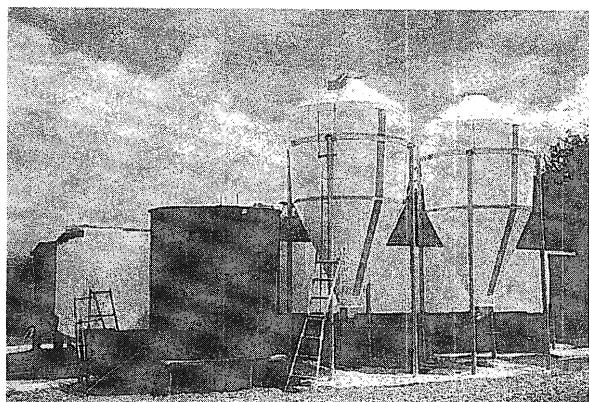


写真1 給餌施設の外観



写真2 庇陰林での豚の状況

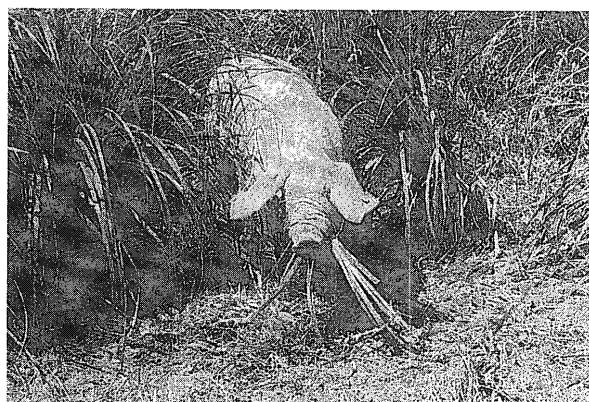


写真3 チカラシバの採食状況

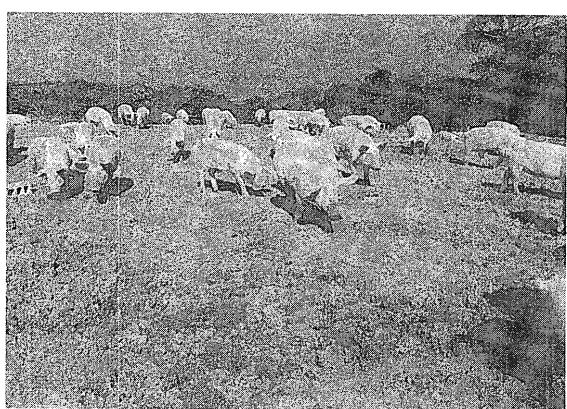


写真4 雜草が完全に除去された草地

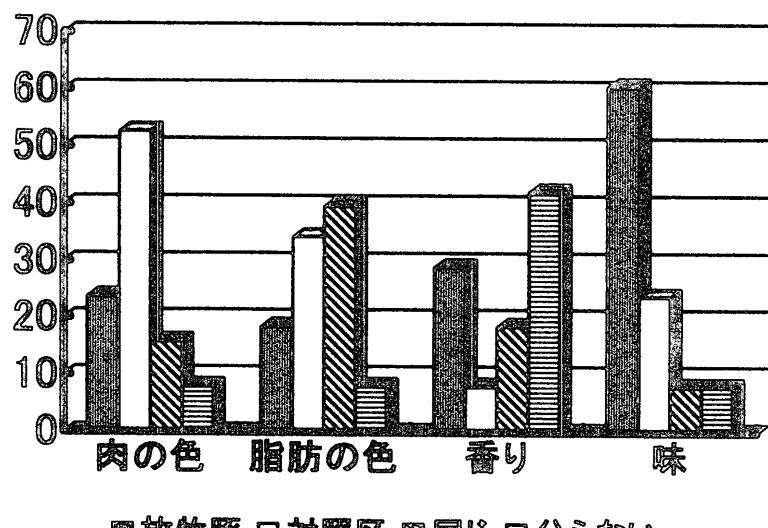


図1 食味試験の結果